尾張名所圖會

附録

三

第壹六門 紀年事部
第 貳 冊
建帝 明治廿五年
東京帝國大學圖書之印
東京帝國大學圖書之印
顧番 一八六八 號
明治廿五年 月 日
品目 尾張名所圖會
傳附 故事部
類有物品
明治廿五年
會計課
第 門 號
第 冊
文第 634

愛知県有物品

小治田之真清水卷之三

目録

愛知郡

則武庄　則武三大夫　秀吉公實父　日吉丸童遊圖
小出秀政宅趾　加藤清正画像　八幡社　椿之森 同河童怪圖　烏森里
米野城墟　善行寺　青鷺の妖怪 同圖　横井越前守
八田舊郷　神明社　福富平左衛門　奥村伊豫守
大蟠蝦村　池田恒利宅趾　岩塚驛の圖　喧嘩池
佐脇藤八　西生寺　大鰻鱸 同圖　義女於勝
三十三所觀音　伊勝村　織田七兵衛尉　十三塚
京土　白山權現社　長久手村　本郷村 未女上洛の圖
勘解由塚 同故事圖　和尓良神社跡　天地社　山口溪龍穴 同圖
憂成男子 同圖　三ヶ峯　碼碯　千年松
長壽老婦 同滝難圖　佐久間美作守　濃婆姑

中根城跡馬渥浴圖 / 寝山 / 島田古縣同古覧圖 / 大毛舊郷
田光池 / 年魚道水 / 配流人謫居地 / 師長公出家
同帰洛御迎圖 / 若宮八幡宮 / 櫻田 / 頬脹観音
宮本武蔵碑 / 宵月濱 / 星社同星降て成石圖 / 鳴海邊惣圖
正行寺 / 上田主水正 / 長命井同古覧圖 / 善菴八幡祭圖
賢憬法師 / 鳴尾松 / 鳴海庄 / 鳴海余一
地獄沢同卒都婆橋圖 / 狼奇事同圖 / 章魚圖同古覧圖 / 諏訪大明神社
出生寺舊趾 / 二村山 / 野並梅の圖 / 冨士浅間社

愛智郡

則武庄　祢宜町の西なる牧野村を始め南西の方佐屋海道の南まで牧十村を則武庄と唱へり其ことの親郷ハ今も本に村といふ昔愛智氏にて實名を則武と名のりし人の領せし村〻を則武名と唱ひ習ひし地なるべけれどさる人古書実録等に見當らねバ今ハ知りがたし爰に脈系譜に源頼朝の弟阿野法橋全成を愛智と称しその孫愛智四郎頼為ゆゑありて陸奥の紫田に配流せられしが召返されて後元暦二年八月三日伯母愛智尼浄圓が遺跡尾張國愛智郡同則武名等を下され頼為知行安堵せしよし見えたり則武ハもと此浄圓尼が父か或ハ夫れけの実名の名残にはあらじかや後人よく詳しく考ふべし

則武三大夫ハ　此庄のうちの人也といひ傳へられど其出生の地定かならず常山紀談に山崎の軍に堀尾帯刀吉晴の士則武三大夫首を取りて吉晴の前に来る吉晴思ひしよりも出かしたりと詞をかけられし

こうは則武怒つて首をとりて進ずるかの時ハ大将も目がくらくなる物にハ三大夫が取のこす首よく御覧ゆへと罵ば吉晴も憎き奴ゝ
ゝとゝ俄に刀を抜て斬られ一に曹の星を削るより則武真一文字
に敵の中へかけ入又首を取て帰る吉晴ハ必則武討死せんと悔て
思ひ一所小則帰り来りけるハ大ゝに悦て汝をさぞふかめる詞
ハ賞すべき餘りにおもしろかりしが剛の者にゝ乏き詞小
わ〻我ゆやまちうてこそあれ汝が二度の先ゞけ大ゝにまれ
よと感心されなりと志ばせり倍臣なるまれなる高名なり

秀吉公實父の事　睡餘操筆に豊臣秀吉公ハ日輪の化現なりとゝ母
の夢に日ゝ我胎内ゝやどるとてよりてとかゝ尾張の邊土
ろいやしき女なり父ハ紀ゝ人なりゝゝ人も八須賀の蓮華寺の僧彼
女と密通して出来ゝる子也出家の子なるゝよりかくして世人志
ずといふり妊娠ゝ間に他夫に嫁ゝるにより土民の子ともいふなり

と志ばせり然らハ蜂須賀の弘法大師ゝ再来ともそうぞ〻
名所圖會に貞徳ゝ戴恩記を引用して後奈良院の御落胤のよう記
置きけるとハ雲泥の相違なり實ゝ帝皇ゝ御たねなりハたゝ庶民ゝ
猶子なりとも関白の高職に至らむこと孫ゝ〻〻さるゝ御功
今ともいひつゝいやしき真言坊主ゝ内證子ふてゆくまでなり昇
ゝ和漢に英名をかゝやかゝ珍ゝといふ誠ゝ此公ゝ御手柄此類な
ゝ大系譜十卷あり板行本三　武家評林系圖多ゝ小山門の住侶昌盛法師江州浅井郡出生の人還俗して國吉と名乗ゝ尾張國愛智郡中村に居住す其子中村弥
助吉高士といふも士民なり其子中村弥八昌吉これ則秀吉公の
父の由志ばせり此説ゝ據まこと天台坊主の曾孫也されども武二書ゝ
系譜ハ正しかゝらぬ物だれハ尤信ずるに足らぬ又異説ゝて罪人を
ゝぼ〻船にのせて大海ゝ流しなりゝが此中村に漂着そを拾ひ秀

日吉丸幼稚乃遊戯

華月。仁王ゥ
鉄拐ゥ。と日吉
丸でたゝ〻
事名所圖會
にのり合そゥ
な〻

吉公乃父ハその種姓乃ましまるべきなる物もなきと猶更うけがたき
虚説なりと一一不思議に立身なりし人なれハ猶亦蛇足と添へいふ
べくいひなすべき手柄なくて偽と作り儲けしる書籍すくなか
らず且又儒者のるひしくて至らぬ見識と立公の性質行狀ハの可
否と議論し或ハ和め或ハそなハ皆夫この才学と以て是と評論し漢
文と飾り筆記して得なり顔ならハあるべき事多し只天然奇妙と
得なる名將也と推察すべき事也林春齋先生の七武に豊臣秀吉者畎
畝之農夫草莽之賤奴也或捞泥鰌以責之或提芒鞋而從馬其貌矮小雖
如猿其氣壯大竊金以買衣横刀以為丈夫云云と何の如き見苦敷身分
なり出世して身乃鐃方治寛文頃板行の古記なりに秀吉公伏見に御在城の時宇治
の住人何某に御秘藏の飼鶴を預置れしがいかなりしたり口人箭と鶴
出いでくとなく飛ゆき分り預りの武士迷惑し所へ尋ねさせけま
どと行き方知まさりしハ余儀なく伏見に参りて急狀と奉り其由

を言上す公きこしめし其鶴いかなり逃のびたるぞと御側の人に
御尋ね有しハ定めて教人と走らせ進ひとへさせんとの御事なり
るべしと思ひて或ハ二三十里又ハ五十里も飛行きけるぞと
百里二百里までハ得立さるべしと中に公完尓と笑ハせ給ひさるハ
唐土までハすけゆくまじ日本の地に何ぞ心限りハ我飼鳥なりと仰
られてさて御咎となりしよりも志なせたるひまて經昇り醍醐
の花見地野乃茶の湯ホの遊戯となして風流のすき所行なりハ
むしれ草川泥鰌すくひホのうきと晴させられしなり一其實事
に至りてハ信雄信孝両君への仕向け秀次退治異国征伐ホ定めて深
意なるべく忠ハ不忠ハ仁ハ不仁ハ凡慮乃そなり知る処にあらず

小出秀政宅趾　中村にあり播磨守藤原秀政とゝめ甚左衛門と称す小
出五郎左衛門尉政重乃子也豊臣秀吉公と同村の人ゆゑ仕へて登庸
せられ和泉国岸和田の城と賜ハり領す其上秀政の室家ハ大政所殿

中村妙行寺所蔵

加藤清正肖像

前肥州太守清池院殿日乗大居士

于時慶長第十六年夾林鍾下旬

の妹なりゝまゝ其親〜ミ厚く文祿四年大祿ゝ給ひ但馬國出石の城と拜領に　御一統の後　御當家に仕へ奉り忠勤怠らず慶長九年六十六歳にて辛去嫡子大和守吉政家督ゆづり〜なり白石先生の著書に記せり

八幡社　大秋村に祀り所ゝ氏神とし御神像應神天皇馬上ゝ御姿甚古雅にして尊〜例祭秋の彼岸明きすり七日目に行ふ氏子の若者獅子舞をなす舞踏奇態をなどこう人の目を驚ゝ大秋の階子獅子として其名高〜府下及ひ近郷の遊人来集〜て見物ゝ文和三年四月廿三日ゝ熱田大神宮一圖御神領目録のうちに愛智郡大脇郷留拾町六段三百歩云云と見えゝりむ〜ハ大脇とと書たり〜ろう（今川氏豊の屬士當所の住人大秋十郎左門ハ天文頃の人なれ文和ゝハ〜ろのちの事なり）

椿ゝ森　中野高畑村の東ゝ位笠瀬川の西岸にあり古木生ひ茂り山茶ゝ大樹も多く交りていと古めうき杜なり山岡茶安が著述にて

寛政十年正月板行の百二十石といふ随筆に織田家の家来にて今ハ致仕〜ゝる河合小傳治といふ老士中下ゝ西に居住〜ゝるゝ宝暦六年七月三日の曉ゝに目きめて寐られざりゝれゝ野外の曙ゝ景色をえんとそ押切田面ゝ立出ゝちこち歩ゝるに七八歳ゝりとおぼ〜き小児一人跡にけきて泣ゝ面あや〜みていけこへいくぞと問ひ〜こハ我ハ椿の森ゝ住む者ゝ押切の水車まそゝえと答きゝ〜ハ前ゝ立てゝ少めといひゝるにいなれゝ〜ろにゝもうんといひけ〜小傳治ゝ肩に手をゝけ引倒さむとゝ其力の強きすいふ〜ろうなり小傳治勇強の男なれハ引ゝ〜てはのれ河童不屈なり我昔ゝ身なりゝば一拳ゝ打殺すべきゝ今ハ念佛修行のみゝ老人なれハゆゝるひ〜ゝ〜みゝけゝれゝを忽ち笑瀬川へ飛入ゝ〜ゝ去ゝきゝ此川佐屋海道より南に至りてハ水深く杭を流〜けまと此度より北数十町ゝ程ハ近年川成埋れ水浅ゝまゝばかゝ怪〜き物なゝ更に棲む事

形し 河童ハ所にて方言替りかはらんへかはろうかハ小僧かハ太郎なといろ〳〵に
呼ふといへとも皆一物也狐狸の如き形ある化け物ハ又ハ天狗木魂やうの精氣のみの
妖怪ハ今詳ならす凡高山深川ニは必異氣ありて正氣を山祇河伯と称し邪氣を山姥河童
とよべるにやあらむいま山姥河童なとを生捕なりといふ事をきかすされハ真實の形ハ
なき物なるべし旧本の今昔物語集に西の洞院の西陽成院の住給ひし跡ハ後に人家となり人
すみしが夏の頃長三尺許りなる翁の来りて寐たる人の顔を撫りけるが小兵立
たる者ありて或夜其怪物を捕へ苧縄にて高欄に結ひ付けれハ翁手をあげて我ハ水の精也盥に水を
入きて給はれといひし故望みの如くしけれハ翁盥水に影を移しやがて其中に入り水となりて消
失せけり此渡りに古池の跡ありて萍菖蒲なとの生茂りたるが其池の精異のかゝる怪異をなしゝ
由記せり是後世の河童の怪のたぐひなるべく大和本艸附録に淮南子左傳註疏なと引用して魍魎川沢之
神也といへるハ河童なるべしと貝原篤信のいへるにも精神なりとすれハ実の形ハなき物のよしなり又
易林節用集に獺老而成河童といへるハ河にその充龍へよるすて形のあるかけ物なるべし 大和本草
に河童所々大河又ハ池中にあり五六歳の小児の如く村民奴僕の獨行する者往々於河辺逢之則精神昏冒
すと云此物好むて人と相抱きて角力其身涎滑にして捕り定めかたし腥臭満鼻短刀にて欲刺とも不中角力
人を水中に引入きて殺すありり人ハ勝ことあらハされハ没水て尺寸其人忽恍惚として如夢而帰家病す
一月計り其症寒熱頭痛遍身疼痛爪にて抓られたる有之此地人家に往て為妖種々怪異となして人を悩す事
あり狐妖に似て其妖災殊甚し云云とあるして貝原氏ハ獣類にて形ある物とす三河雀に参州榛原郡に
河猿といふ奇獣ありて川の辺にて馬此獣にあへハ忽ち倒れ死す依て馬の疫神と名づけて甚恐るゝ由記し
賤の小手巻に美濃國恵奈郡付知加子母川上村辺に川熊と云物あり水中に住む先年人網をかけ
またハ水中より差出人を向ひけるを切殺しけり又野飼の駒をもかゝらをと鉄炮にてうちとりし
といふとんきやうる河猿河熊同し獣なるべし
是又河童の種類にて実の形ある奇獣なり

米野城墟

下米野村笈瀬川の西岸にあり今猶城屋敷とよび其地殊に
廣し中川弥兵衛の居城跡也と里民いひ傳へて信長記に弘治の頃

米野の城主も林佐渡守の与力にて信長公に別心の様とあるハせ
としもありしたるハ此中川氏なるべし又織田真紀に弘治元年公執権
林通勝弟光春密謀立信行云云謀令所属荒子城絶熱田与清洲之路籠
野大脇二城絶清洲那古野之路而畧奪公充厨用篠木三郷築塁於川涯
掠川東貢賦焉と見えたる籠野ハ當城の事也米野むかしハ薦野とも
籠野ともかきたりし事古書録古文書ホに多く見えたり隣村大秋も
他國人ハ大脇と心得て如此志るし置つるなり

安井山善行寺

北一色村にあり浄土真宗東派元禄六年より國君御
目見地となりもと米野村にありて臨濟宗普廣寺と称し開山洞屋
祖潭和尚也第四世乃住僧覚順首座（俗姓平井氏濃州多藝郡人也）の時蓮如上人に帰
依して當宗に改め北一色乃住人（ありひハ城主といふ）祖父江隼人の本願にて其
第宅乃西南にうつし殿宇を営建に（明應のはじめより文亀元年に畢ぬ）これに依て覚順を
當宗の第一祖とす第二世海善ハ覚順の附弟俗姓織田氏信長公の親

椿の森
河童の怪
和漢名数に河童を
かしらにと月へ行しなくに流れ
もつて八月のけしきかな
善庵随筆に河童の事あるを見ていと
尽きなんに
ひ

族也はじめ京都安井御門跡に投して薙髪し後宣如上人に歸依し改宗して當寺を主務し真藏坊の号を賜ふ（山号ハ安井御門跡賜ふところなり）海善の子息後学ハ有髪にて弟三世の住職ㇾ（宗門ニ有髪の例多し是を毛坊主と称ㇾ）或暁府城檀家の営齋に赴き米野村を過ぐ路傍の弁財天の杜の樹上に妖魅顕はれ高声にて毛僧の齋無益也といふ後学頷て釋迦既八相（髪相と八相と和訓通す）を备へければ妖魅ハ揶揄ことはぶやきて逃去りぬ其のち剃髪普通の僧となりしよし寺記（享保三年の補写）に見えたり智僧一言の即答に妖怪負けて退きしハ名誉といふべし當寺の鐘ハ安永四年の新鑄なれど江州長濱横超院（東本願寺御連枝御坊）の真央主の銘文を書して和歌を鑄つけたるの類ひ少く世に珎らしければ寫してここにしるす

（一念の往生定まりたるうへには佛恩にも師恩にも余詣のおゆみともふしと告るる鐘の声也とふこころを）

つくづくと聴き弥陀と称ふ身ハ定聚の数に入相のかね　釋真央

青鷺の妖怪　長良村と鳥森村とのあひなる佐屋海道の縄手にむかし妖物出て夜行の人を悩ましけり或ハ七尺有余の大坊主となり旅人の後ろより見越て怪しき顔を見せ又ハ婦人の姿になりて妖怪をほどこしけるを或夜名古屋人来りて高須賀川の橋のたもとに待請その化物を組伏せ差殺しければいと大なる青鷺にて有しと其邊の里老聞傳へたり是ハ百八九十年むかしの事也玉滴隠見に延宝八年尾州にて青鷺変して其長七尺計に成りしと也扨其以後女に化けて人をたぶらかしけるを　黄門公聞せられ何とぞして足軽に捕へさせよと有司に仰られければ則申付られ組留めけるとなんときはせり（凡青鷺ハ形を変して怪をなす物にあらず全く陰鳥にして闇夜に碧火を発するを怪とするのみ同玉滴隠見に延宝九年二月の中頃於上野両度出火有之につき鎮火衆卒らに駈付られしかど彼御山にハ何いきもりもあらざりしが後にきけば青鷺のしわざなりと志るせり是実説なり大入道や婦人に化けたりといへるハ一時の附会虚説なるべし）

鳥森里　岩塚驛の東の佐屋海道にあり熱田の方へゆく本海道と名古屋の方に赴く柳街道とのちまたさ追分にて休ミ茶屋ㇳもありうすもりの城跡のあとにむかし大樹の杜ありて多くの鳥のやぐらに棲ミ

公命と奉りて寺卒
まち陽代妖ととも

しゆ忘鳥の森といひしが今ハ畧して かすりと呼へり 紀伊国名草郡鷺森なり 同

例の村名なり 其老樹も枯なせて跡もなけれど泊鳥なとハ今もすく

殆うし 東行話說

時多れ京にのぼるぬ爲者くらふなりのを国一多れ 移表に徒とを口しる名鳴ふ

八田舊郷 今も八田村とふ和名類聚抄に海部郡八田とあるハ多

殆多一むゝ一ハ此あるり荒手村乃遠海東郡に偏きたり一事古書

に往こ見そゝり 太御門春郡鳴

神明社 万町村にあり近邊数村乃ふすな神也むゝ一此あるり廣く

伊勢太神宮乃御厨たり一時勅請一たる古社乃ゆ一一村名と万町と

ふ人ゆも御厨乃地の名流まと祝せゆ辞より起まゆ鳥追哥とふ

物に千町や万町はとり追ひ参りてとうと一ゆも高貴の御方及ひ

大社ホの庄園乃廣きと祝ひたち詞なり

福富平左衛門 岩塚村乃人也其居地今定うるゝず織田家に仕て忠

烈して戦功多一其行狀信長記織田軍記織田真紀ホと見て知ゆて

天正十年六月二日明智光秀が逆乱に信忠卿に從ひ京都二条の御所

にて戦死す

横井越前守 横井村出生乃人也平太即時淌の末葉にて赤目藤ヶ瀬

の横井氏ともを一族なるゝ一武者修行一て相摸に行き北條早雲及

ひ氏綱に仕て軍功すくれ射禮乃故實鳴弦乃秘事ホに通達一又

和歌ともよくをめり其頃ハ神助とも称す相州兵乱記の永正十五年

七月十一日小田原の北條早雲が同國岡崎の城主三浦介義同と討亡

一条に早雲と三崎に城と取立て房州の敵と防きゆ大将にハ横井

越前守と置給ふ小林平六左衛門と始ゝ一合て二百餘軍彼横井越

前守に相從ふ此横井本国尾州の人乃一ゆ弓箭修行に東国に下り

北條殿に軍功と積て一方の大将と承ゆ此人勢兵の強弓故實名誉

の達者なり或時氏綱此横井神助とめされ鳴弦乃御相傳ゆり 云云卯

月の頃曽我故里乃叙沢乃藤を見んとて各〻打つゝ鞠川を打渡り助成時宗の岩ごゝ〻曽我の里に至り叙沢の藤を詠め瀧の本にをりて

横井神助

滝水にうつる影ふ新も立ちぬ松ふ賀りて咲けるあやなる

神助

春やむかしの花のうを忘るるとりに咲けるあやなる

と志ゐせり神助相摸の三浦乃城代なりて武功ありし事ハ快元僧都記にも天文七年戊戌十月一日向下總氏綱父子進發是小弓上様成明里見引卒鶴臺御出張アリ同六日氏綱江戸城出陣同七日合戦敵上様并御曹司基頼公三大将推津村上堀江鹿島等面々競戦フ氏綱先陣志水狩野堂原遠山伊東等防之急ニ攻戦小弓衆打負御曹司様上様御舎弟基頼御討死小田原方安藤備前上様御手ニ懸リ討死ス三浦ノ城代横井神助上様義明ヲ奉討落松田弥次郎御首奉討取云云と見えたり

大蟷蜋村 横井の南にあり むかし大棟梁と唱へ人こゝに住すゝ加里の名を彫り文字を志ゐ書き残りしが二百余年以前より棟梁を蟷蜋とかき改めしを武内大臣を棟梁臣と称し人明衡消息に先約之人詩歌之棟梁管絃之上手也と云る如く大工乃先達のみ棟梁とりつかさどり何事の道にも其業の長ずる人をもまねがむる通称なりされハ此地小愛智の郡司乃大領などゝ住みたりしと一郡の者共大棟梁殿と称しなるゝ頓て里の名と成り物の番匠の頭なんどゝ居しりと地名となるゝハ云云

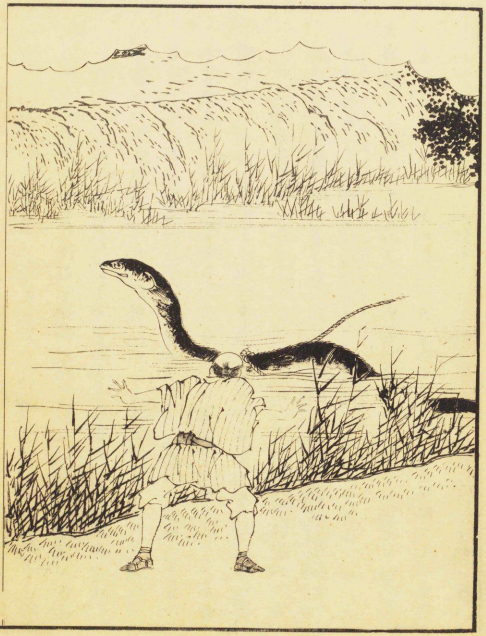
池田恒利居宅乃跡 荒子村ふり塩尻に池田紀伊守恒利ハ拷洲の人なり 補正行の男池田十郎教正の商也 万松院将軍義持公に仕へしゆゑありて薙髪宗傳と号し尾張國愛智郡一柳庄荒子村ふ移り住せり信長公の乳母を娶ぶ是則江州池田家の女とや と志ゐせり普通の家系と付傳説少しく替りていと珍し

岩家驛

奥村伊豫守永福　同村乃人也もとめ助右衛門と称す壮年より前田利家卿に仕へて智勇兼備の功臣たり父助右衛門宗親ハ赤尾市十郎藤原忠利の嫡子にて初名を助之進といへ中島郡奥村に居るゆゑ信長公召て荒子村を賜ひしかバ移りすめり旧在居乃地名により て苗字を奥村と称し前田家の女を妻として永福を生めり小瀬甫菴乃太閤記に奥村助右衛門尉ハ利家卿より加賀能登乃境なる末森の城を預り天正十一年五月七日城主入部の規式雄々しく粧ひ一族繁栄先祖の面をほこりかゝて強敵をうけて籠城し闘戰をもつゝ危く堪ずるきに至ばといへども士卒をもげまし油断なく守り終に利家卿の後詰の助勢を得て大功を遂けり助右衛門の妻女も又すぐれたる利発にて昼夜城中を見廻り士卒に物をいたゝいて労倦を慰め種々工夫して警衛のたすけとなせり誠にめづらしき賢婦なりしなり志ばせり

佐脇藤八良之　同村出生乃人なり尾陽雑記にのする前田系圖に前田藏人利昌乃五男藤八良之佐脇氏養子と見え織田軍記に信長公乃御小姓に佐脇藤八といふ若者ありれも前田利家乃弟也と志ばせり戦場にて強勇と勇ひ肘を切られなゝ敵の頸をとるの如き不まれ多し織田真紀の永禄元年浮野合戦の条に林弥七郎者逐橋本一巴射中脇下一巴鳥銃中弥七郎仆佐脇藤八欲截其頸弥七郎起坐斬佐脇氏左肘逐進取頸云云と志るせり其勇烈さくの如し永禄六年諸役人附の外様衆大名在國衆のうちに佐脇上野介毛張郡と見えたり上野介ハ藤八の別名乃或ハ一族の人乃知りがたけれと其頃在国衆と呼ばれて尾張に住居ひり歴々の武家なり

寶林山西生寺　小塚村にあり浄土真宗東沙元禄のもとめより國君御目見地と称る開山西光法師ハもと鍬倉将軍家乃武士にて俗名木村左兵衛尉と称す文治年中故ありて流浪し當国愛智郡今の前津小林の地



大鰻鱷の奇事

老媼茶話に慶長十六年七月蒲生藩城守秀行會津只見川毒流しの為に捕られし其前後大四五尺斗の鰻鱷備に化りて山里に来り衆集の毒殺やうへ事ア慈敷やうすりまうそ同じたらいなり

に移住せり其後親鸞聖人関東より御飯浴の時智多郡大野まて謁
し奉り則御弟子となり法名を西光と称ふかくて前津に一宇を建立
し聖人より拝領の九字の名号を安置し西光坊と名づく西光七代の
孫誓心の時地を轉して丸米野村にうけり其子誓海の代に笈瀬川の
水難を厭ひ天文元辰八月今の地に遷り殿宇を中興し繪像の本尊を
安置す其のち今の山号寺号に改めしを誓海の舎弟遷俗して前田
利家卿の小性に召出され軍功重累して七千石の恩賞を拝領し叙爵
して小塚淡路守と名乗りしより寺記に見えしり小塚淡路守同八右
衛門ホの武功ありし事ハ太閤記にも志ばせり合せ見るべし（因云小塚ハ
如るき地名にて洛陽妙顕寺所蔵の元弘三年五月十二日寺領寄進状に尾張国松葉荘同国小塚郷とあり張州志畧に記せり）

大鰻鱺　中川筋にうなぎ多く九龍へたば大うなぎもたまくにも見
當る事ハまれ里人さのみ捕ふ事を欲せざるゆ秉穂録に尾州中野
村乃水遣に大なる鰻鱺出たりと縄まてくり五六人にて引すて

に少しも動かす志ばしくとも引きたりは是らハ皆其種類の王なるべ
しと志ばせり定めて中川より田ぬちなんぐ一登り居しを里人等と
らへんとして取り逃せしなるべしかば大うなぎも食して毒な
大和本草に日向州の鰻鱺其大なる事他州に倍せり其周圍一尺餘長
六尺餘ありて食して無毒と志ばせり国華万葉記に鱣の井江戸青山権太原より
ありて今松平安藝守殿屋敷の内にあり
長一丈計りのうなぎ居りと志ばせる同したくひも久紀伊国名所図会に海士郎
播州村の南大明神の神祭りなぎとあるも如ば大鰻鱺を祭りしものなるべし

喧嘩池　中野村の南まなり編年大畧に元和七年辛酉七月十四日名古
屋乃武士八人愛智郡中野村に行き池溝乃魚をとりけるが田畠を踏
荒しけしとて郷民大勢出て諸士を打擲すれば依て百姓頭取二三人
斬罪諸士八人追放仰付られ翌元和八年十二月廿八日八人の武士
一類どもくひ中野村百姓男女六十余人夜討にす大坂窄人岸田何
其當村に居しを勇戰し数人を切り終る討死ス誠に大騒動死人怪
我人山の如く川沢血を流せり其後諸士親類数輩御仕置仰付らる

後年中野村けんを池と呼ぶ所ハあれとあらすしたがせり

三十三所觀音　柴田新田にあり慶安元年の営建なり當新田ハ柴田の木芽渡より万塩川まで東西三十余町あり其間に民居一群ハ三十三所にそれ住め東より一番二番とついで西のそてと三十三番〳〵其番毎に觀音堂一宇ツヽ建立て西国三十三所の觀音に擬す依てそれぞれの村と一番割中程を十六番割などとにより

伊勝村　御府外の正東にあり鳴海庄といむ〳〵弘法大師法力にて水をとゝめられしつゝ井の水もとゝく渇しけりゝ名井渇の里をいひ〳〵ゝ後る伊勝村と名字を改めしよりいとゝ傳へいふ正事記に伊勝村にハ井戸一ツもなし昔弘法大師此所にて水を乞給ふに郷人慳貪にして水ハなしと奉らすそれより俄る井の水をくなりけりゝ村の東の尾先に清水有ると汲てつふと志ゆせり

織田七兵衛尉信澄　末森の城主織田武藏守信行の嫡子也明智光秀

のむすめを娶りて其親〳〵厚〳〵信長公ハ伯父なりといふ〳〵と父信行の仇敵なれハ信澄其恨をなきにしもあらはど時乃権威に歓〳〵くむ〳〵年月を送まり扨信長公の明智に非道の恥辱を与へ給ふ〳故光秀憤りて我逆に及ひ〳と世に沙汰すれど明智が誠の下心にハ公ハ智の仇なりこれと我〳〵天下をとり信澄を世る出さんと構へたりもしらず〳〵其證ハ祖父物語一名朝日物語に羽柴筑前守備中乃高松より山崎まで四十七里をうつり一日一夜に山崎に着給ふ大坂へ七兵衛殿明智差圖すて差出す是ハ三七と五郎左に腹切らせんとの事也七兵衛殿と申ハ織田勘十郎殿の惣領明智が為に智なり大坂千貫矢倉に居給ふ五郎左ハ王造り三七ハ京橋口乾乃角矢倉に御座〳ます夜中に三七殿小性一人すて五郎左宅へ往給ひ七兵衛内さゝ支度ハ我と其方明日吊ひ合戦に出る所を討〳〵んとの謀すて京橋へ人数を出〳たりと聞くいそせんと宣ふ五郎

長久手合戰場
勘解由塚故事

左其時奇特なる御出哉只今我が参りて御意を得べく存候所也明朝
吊合戦に御出候へと御人数を揃へ待候へ我鉄炮二ツ打て〻其時
糸を御取千貫矢倉へ懸り有て〻七兵衛が人数京橋へ出〻たるを
幸ひなれ七兵衛身の廻りに八十二百もとり候へと申す密の如く
翌日朝相圖の鉄炮を五郎左二ツ打けるハ三七殿糸をとり千貫矢倉
へ攻かけ即時に七兵衛が頸を取てさらいにさうれけり味方の者
共信長の変に氣を失ひたる間先ツ此首とる〻味方の勢に氣を付
けはなんの為也と申ける三七殿吊合戦に出給ひ時七兵衛の首
を板に打付馬印のごとく〻〻持させ給ひ池田勝入羽柴筑前守是を
見て御手柄と申す御吉左右也定めて明智男子ハ彼〻天下ハ此人へ
譲ひ〻〻と存ず〻〻御手柄〻〻殊の外誉め奉ひ〻〻と志ひ〻〻たる
と見て密す〻〻織田軍記にうけつも大概これに同し

義女於勝の事　　末森乃城主織田武蔵守信行の奥方に召つかれ〻

勝と云ふ女ハ京都の生れなり〻〻が奥方の侍女に抱られて奉公す
容儀も立ぬるまひもよく諸芸に達けるは一入主君の氣を入り精
勤〻〻り信行の侍臣津田八弥ハすれ〻ひ美少年なれて側近く仕ハ
せけるが同輩の佐久間七郎左衛門と意趣を含む事出来せり七郎
左衛門恥辱とうけ〻〻事なり〻〻と憤りて火事なり〻〻時騒動のまぎれ
に七郎左衛門間打に八弥を殺害す其事既に顕はれむ〻〻なれバ七
郎左衛門が兄佐久間玄蕃方便をめぐら〻〻早速城下を立去らせ美濃
乃齊藤道三を頼て稲葉山に伺候させなり此騒動より十日もとり
以前に信行の計らひにて於勝と八弥が妻にすべ〻〻と媒せ〻〻る既に
夫婦の契を結ひ盃を取結ひけるに八弥かく横死〻〻けるハ勝女うれ
〻〻に堪ず何卒〻〻夫の敵を討むと心さ〻〻其すべを願ひて奥方に
暇を申請稲葉山に至り縁をもとめて道三の奥方の侍女に抱られぬ
翌年三月十五日道三家中の侍ども〻の騎射を一覧なり〻〻が奥方もす

愛智郡司のむすめ
采女に召まて上洛

き見せられしに十五番目に當り佐久間七郎左衛門と名乗て射禮を
志さしめける所一籠のうちより勝女走の出るを見て用意したり燥
劔まそ七郎左衛門が脇腹を突通し一刎ねり刎ねりて後まもなく津
田八弥が妻なる夫の仇を報ずと名乗りて終に討果しけり其驚動
大形ならず道三委しく聞たまへ誠に貞節賞するに堪たり然るに
七郎左衛門は我聟信長の寵臣佐久間玄蕃が弟也彼是意趣のこりて
は所詮なり彼は明日勝が首討て双方穏にはきもつと其計らひに
極まりぬ奥方いとく勝と良と其夜むそうに立退りせ人をつけて三
河の岡崎の御城まで送らせ志らく節義を褒るまひたなかに候何卒
御かくまひ下されなと頤ひ奉らせ給へ則御許容遊ばされ其名を尋ね
給ふ勝と申すと申上げれば笑はせ給ひ勝が来るを目出たいと仰ら
まて御奥にさへ置給へり玄蕃これを聞いるにもして勝めを成敗い
たすべしと信長公へ訴へけるに公諾使を岡崎へ遣はされ勝女

を貫ひしとも乞はれしかども岡崎まそは承引給はず又敵をうつ法
さへになりと仰られて帰了給はず玄蕃いよく憤り途中まで勝を
奪ひしかんとて侍二人岡崎に遣はし忍ひて窺せられども勝
女に附添る武士ども厳しく寄せつけず剣に二人を搦めとりて
上聞に達しけるに則盗賊の所行に取なされ終に死罪に行はれぬ其
勝は御恵その程身に余り有りとなれど万一此事にすり三河尾張両
君の御中たがひとなりては叶はじと思ひいん忍ひて自殺しけ
るいとく哀れ成ける御菩提所大樹寺に葬らせられ佛事を
懇にいとなみ石塔を建置らせ給ひしとぞ我友渡邊芸里の所蔵
の勝女の雜記に見えたり因に云俗間の方言に人の妻女をうてなかけ
の鈎女の狂言にうたくおかけをうてなるよ下女をうてつる十七八
とけるとなるつり三四百年以前よりの俗語なり

京土　末奏村より出つ君山著書に黄土出末奏村色黄細膩可以塗鮮俗
謂之京土有官禁不許謾採又有赤土紫土可為圻壇之用と志侍

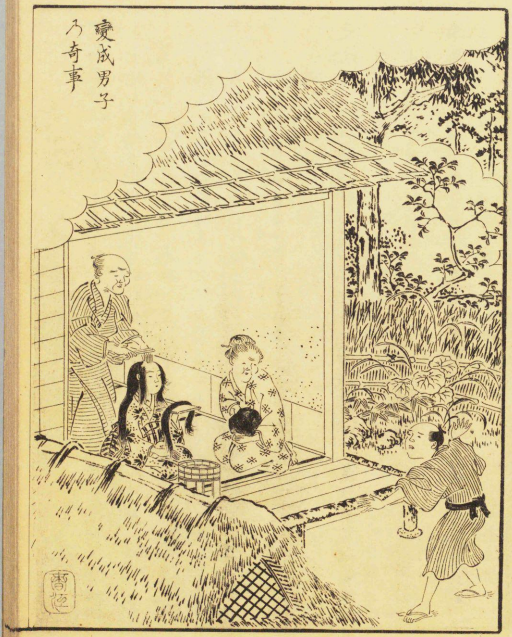
白山権現社　藤森村にありて所の土産神なり　後花園天皇乃永享元年の創建也祭神ハ菊理姫命なり山城伏見乃藤森社と地名ハ同じけれど全く別神なり

長久手村　山田の庄のうち也君山著書に又作長淑按国俗謂卑湿之地為久手此地在山間故呼為長久手者也と志ほせり美濃国土岐郡細久手驛大久手驛も同例なり山間の湿地なり

十三塚　岩蓑山の西口上ち原にあり此野に古墳十余所散在し俗に是を十三冢と云岩蓑城兵乃墳りと張州志畧にいへり

勘解由塚　長久手村と猪子石村との間なる道乃傍にあり関白秀次公の家士木下勘解由が忠戦義死乃塚なり志ほし也天正十二年四月九日長久手此合戦に秀次公ハ後備にして惣勢より三四十町ばかり跡につき猪子石山のうちに陣取り兵粮を上ゝめさせ居られ乃所に大須賀康高神原康政水野忠重本多康孝岡部長盛丹羽氏次ホの人々

不意にうしろより鉄炮を放ち馬をのり入れ小荷駄を切崩しけれハ秀次公乃軍兵ちりぢりに乱れて敗北す秀次公馳せ退くんとせしまに夜明方のなのなく口取の歩卒ら洗たて馬を牽き来らさるけまぼ途方にくれ居られしが可児才蔵が騎馬なるを逃るを見つけて其馬を我に借せよと仰ちまるれバ才蔵笑ひて両ふりの傘付奉らしといひけく逃のびぬ木下勘解由ちなゝ遠方より此躰を見て早速駆付け馬より飛下り秀次公を乗せまいらせ自ら我身ハ歩行立になり追うけ敵を防き其場を立去らず三河方の青山久六重次と突合しが組打になりて終に勘解由ハ討ぢに乃りむしり建武の軍に小山田太郎高家が義貞朝臣に馬を奉り其身うちたちと成てうち死せしと全く同じ忠義を勇ましび美名を後世にのこしたる古跡なり此外長淑合戦乃古記録ともにのせ乃戦死の人々ハ墳墓甚多く所々の山陰に散在せり中にも豚入塚紀伊守塚武蔵塚なと呼ばハ歴々乃大将なり


變成男子
乃奇事

三ノ二十三

のかゝみまて今ハ夏艸に夢の跡のみのこせり

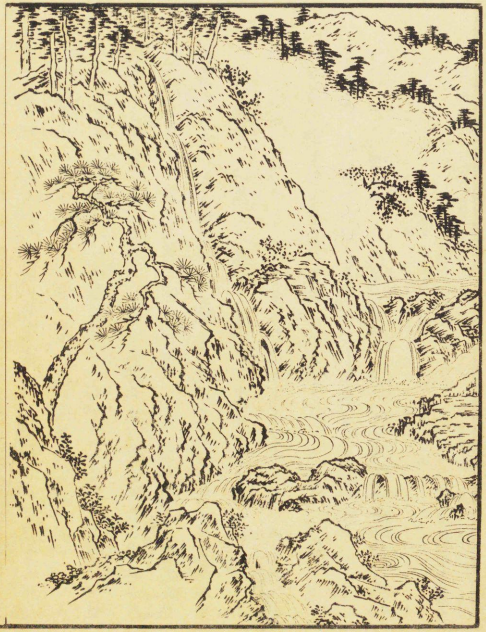
和尓良神社の廃跡　延喜神名式の山田郡十九座のうちに和尓良神社と見え本国神名帳に従三位和尓良天神とあらせ給ふ官社ハいつの世にかすたれうせて今ハ其跡だに知る人なし然るに我友浅井土叟平の説に長久手古戦場遠からぬ山間に字をまに浦と呼ふ地あり所のさま古めかしく木立も殊勝なりけりまにらの神社の廃跡にハあらずやといへり其可否ハ知らねど面白き考へなれハ志るし置つ後日に探索して定むへし

天地社　赤池村にあり君山著書に祭神不詳明應七年戊戌建之と志るせり今按るに天神地祇をすへて合せて祭るなるへし（濃州志畧に可児郡古瀬村に天地大明神の祠ありよし志るせりと同例にておもしろき社号なり）

本郷村　今鳴海庄とよびて愛智の本郷なりけむ郡司の太領少領なんどのたぐひたる人々ハ此本郷に住居しならへし日本後紀に弘

仁四年正月丁丑制令伊勢国壹志郡尾張国愛智郡常陸国信太郡但馬国養父郡貢郡司子妹年十六已上二十已下容貌端正堪為采女者各一人とあるハ天皇陪膳の采女に召されて當郡司の娘が京都にのぼり宮御奉公をとめしなり（采女ハ官女のうちにても其数多く後宮職員令に膳司に六十人水司に六人などと見えたり皆うちの正しく顔の美しき女なれバ都のうちのミにてハ揃ひがたき故諸国の郡司の女あるひハ妹などのうちより撰ひ出して貢せしめ給ひしなり類聚国史の大化二年正月甲子朔の改新之詔のうちに凡采女者貢郡司少領以上姉妹及子女形容端正者従丁一人従女二人以一百戸充采女一人之粮と云と見えたり従丁従女に至てすくなけれど一百戸の粮をあてられしかバ今の世の知行千石ばかりに當れり）

變生男子　米之木村の百姓八右衛門といふ者男子一人女子一人もちけるが女子ハ安永七年三月七日の出生屋代と名づけて養育す容姿みにくからず性質すなほにして神佛をも信心しけり寛政十一年己巳の春屋代二十二歳自然と男根生え出まさ日を追ひて乳房も縮まり全く男子となりたり扨元服して名を角治と改め其のち文化二年八月岩作村久八といふ者の娘を妻に貰ひてむつまじく暮しける



山口溪龍宛
龍宛

大豆奈草

名ハ正直

吉田鯉州号ハ一定と云人乃著りたる面白き物語冊写本十にて
と云草紙に志るせり此一條と蜀山人の隨筆野翁物語冊写本十にて
尾州愛智郡米本津村の百姓喜右衛門が娘なりと云者午四月初旬
乃頃より頻りに陰門痛み日に増して張出しなれども女の事故深く
ひそみ為人にも語らず居たりしが五月に至り陰門次第に変して陽
根畢丸くもに全く備りたり依て両親に申なれを驚きて医者と呼
び是と尋ねるに最変生男子と云事相違なき事なれハ則名を久七
郎と改めしと云云と志るせり右村名米之木と米本津と誤り又父娘
乃名前も頗るたがひたれど蜀山人他國人のなれ為と聞て記一置つ
る奇談なれハ少しの相違を咎むべからす其事實の乃一證とすべし
女子の化して男と成り事異国乃書にハ往々見えたる日本大御国にハ古来
うなる事なりしまれいまだ古書に見當らず近年ハたまさに其例ありし原因
桃華に女の男に化せ備中の玉島ちかき邑に姉妹年と隔てしもに男に化せり
と正しくあるよし子乃相識なる彼国の人の話なりなるとぞ此密雲談に寛政甲寅
の春備中めくに檜物屋のむすめまりといふなる一夜発熱して男子となり年十七

三ノ二十六

八歳なり松と改名せり　阿波のくに徳島の在定右村につなとこの女子
十五歳のとき変して男子となり名を綱平と称したり寛政甲寅三十四歳
と志るせり

三ヶ峯　同村の内三本木新田より東なる三河の国境の山なり牛馬乃
通ハ道なりて三河乃伊保峯毋すく信濃の伊奈土に往来す旅人常に
絶えず陀陀法師の足跡石なんと云古跡もありて絶景の地なり

碼磴　本地村の川中より出づれと琢けり甚美なり元禄年中當所の
碼磴と琢磨して関東に献じ洗ひしよりこれ君山先生著書に見へたり
今猶まれくも洗ひ得る物あり蜜産上品乃色正紅なる物にハ不及と
いへども漢渡乃裁子馬脳乃黒白相間まじる物なりハ勝まり最名産と
云べし

本草正譌に馬脳尾濃山川砂石乃間に拾ひ得るもの上品也
と志るせり　本草綱目に陳藏器曰馬脳出日本国と見之日本書紀の天武
天皇元年の巻に摂津国人百新良欲白馬駅と志るせり和産の
物なるべし

山口溪龍穴　山口村乃南にあり山口川ハ矢田川の水源すて奇絶の

昊跡多し春日井郡赤津村の龍淵も此谷より川上へ五六丁遠からず大和ノ山邊郡室生山ノ龍穴とハさ函替りたれど溪流いさきよく所ノさ函を物すきまく實に伏龍の昊窟と推計られたり

長壽の老婦

御器所村に居たり尼なり鹽尻に天正十二年四月長久手の役破まて時池田の殘卒ら長久手の住人丹羽吉兵衛ノ家に乱妨す彼家ハ女を將て西に去るノ日暮に及びて庄内川の迫に彼女を打捨て過しと女ともくして御器所村ノ所縁ノ者ノ尋ね行き久しく住せ後ゆりけ者も皆亡せて同村淨源禪寺に寄て住み侍り元禄十二年の冬百五十歳まて死侍り右ノ如れハ彼尼長久手合戰の時ハ三十五歳まて侍りしわれハ死ノ後時龍與寺の景魂和尚一偈を誦して香を拈せしを見て鸚鵡籠中記朝日氏に元禄三年庚午七月廿六日御器所村龍與寺の末寺淨源寺ノ庫裏姥正念弘治元年の生まれて當年百三十六歳　二之御丸に召して御覧遊ばさ

ら其壯健なるを奇特に思し召て金子晒布ハを多く賜ひ　之ハ

せり丹羽氏の娘ノ婢女ノ今ハ七十ノ女ノ年齢

かくまて長壽せ　ハ誠にめつらしき婦女なり　右二書にハ婦女ノ年齢

いくつ其可否今ハ載しるく　後人の考定をまつのみ　暫く左ひて皆合せ

佐久間美作守家勝ハ

御器所村の人なり嘉吉年中當村八幡宮に社を建しし君山著書にハ其社ノ古き棟札にしれり季瓊日錄に寛正二年己巳三月廿二日惠雲院領尾州御器所佐久間与惣田神宮之公事仍不可混闕所之事令朝重披露之　九月十日惠雲院領尾州御器所之佐久間美作守縱雖被処罪科不可混院領之由預披露之有御領會也　同三年卯月十四日惠雲院領尾州御器所佐久間与惣田宮地下人依盜馬之事教確犯可預御糺明之事同之と見えたハ同人歟ハ此日錄ハ禪僧の筆記にして文義解しがたけれと美作守自若しして惠雲院領にも混せ又守護斯波家にもさのみ從ハず將軍家の裁許と

丹羽氏家女
長秋合戦の時
難に逢ふ

請たりと聞ゆるは文義なれば其須歴とは武士なるべしなり一村隣島田の地蔵菩薩の馬盗人にもかゝ一説ひ一と云俗説いふ其盗馬の公事のむつゝく其馬を彼寺のものとにおくけるの事のありて其ものいひをめけるの妄誕なるもとゝりて盗人なるべしとの神とゝなりて醍醐寺雑事記に横尾明神者本所者石山寺与石間寺之間有小野云所此明神御堂三宝院推僧正御房御時為盗人令奉祀始之と云ふ如く神仏ハ正路なりて盗人を賜ふ一説なり本意なれどもて馬の毛色を皆一説なるべき愚俗の俗説ゆゑ信ずべからず

淡婆姑　石佛村乃名産也俗に藤成たることもゝ此邑の村と赤土乃腰地なり故に煙草培養によく叶ふ故の羅山文集五十九巻に常陸国赤土産のたむころ良品なるゝ志なりと一般なり

千年松　下八事村音聞山にあり一名木なり一〇百五十年のむかし伐りて今ハ其名ごりもなし君山先生の著述の春のなりに八事の音聞山に千年の松と古木の朽残りなるが有一と古老の物語りなり一〇下八事村の寺れ住持が伐りて新とるゝて今を其跡とに知る人なし

松柏摧為薪とい一ふ俗諺を誦一て

名をとりと多夕山にまそとれ山ひ一とすれば松風の音　源秀雲

とゝみて歎息せ一ゝ一志なり天明辛巳の秋九月板行の張藩尚書會記に内藤東園此會を催す東園名ハ正泰号ハ閑水画を巧ゝ又自身秘蔵せ一音聞山乃古松の朽株を會席の假山に莊りて其図を画けつゝ希代の雅物なり

地地図の集　多夕山雪ゆゑ高ゆゑ

門なりてにゆく人を跡一雪乃あと　士朗

中根殿城跡　中根村乃西市場とゝ一ふ地にあり織田越中守信照當城主たり一故世に中根殿と称せり是備後守信秀乃九男ゝて信長記に備後守子息信長卿乃連枝ゆゑ御座に信長卿乃童名吉法師殿ゝを申けゝ別腹乃舎兄に三郎五郎殿とゝ一ハ後大隅守と申一御事也二男勘十郎殿ハ武蔵守殿の御事織田七兵衛信證の親父是也三男上野介殿四男九郎殿五男安房守殿六男秀七殿喜六郎殿半五衛門殿中根殿其弟源五殿と申ハ後ゝ入道一法ひて有樂一ゝ申一其弟又十郎殿と申々ゝと志なり後にて沓掛の城に移住乃一故信雄卿従士分

中根乃城内
馬のすゑ湯

限帳にハ貳千貫と有りけり中根殿と見えたり二千貫文ハ今の知行一
萬四五千石に當れり怯弱の性質にて武事に疎く兄信長公に加勢助
力する器量もなく生涯隠遁してありし故世の人織田氏をさへ称せ
ずに中根殿といへるをもて中根を苗字に呼びしにや天野信景人物誌
に中根越中守同七郎右二人中根村地頭と志るせり七郎ハ子息なる
歟越中守母ハ美婦にて熱田商家加藤氏の娘なりしを信秀盗みとり
て妾とせられし事尾陽雜記に見えたり又名所圖會の熱田の条に
既にのせ置たる松平君山の著書に中根の城主織田越中守ハ天性魯
鈍の人にて常に城外に出る事なく僅馬一匹を飼置き家来に申付
て飼馬五十匹といひ觸させ扱廐の僕に命じ其一匹を一日のうちに
数十度引出しすそ湯あびせ毛形を刷ハせて其偽りを償ひしよし
志るせりさすが信長公の連枝なれハ武将の人並に飼馬の多きよし
を他所人に聞せんとてかく計らひしとぞ織田真紀の天正九年二月

二十八日禁裏の東南北に馬場埒を築き諸侯及び家臣に命じ駿馬を
撰び馳騁せしめて上覧に備へられし条の親族の人々のうちの末に
中根越中守信照と見へたり其時ハ上洛せられしなるべし長壽にて
豊臣家の世までも存生ありしにや熱田神宝のうちに無銘二尺一寸
四分の刀ありて其奉納書の彫文字に文禄三年甲午七月七日織田越
中守と見えたり

寝山（ねやま） 松葉集に尾張名所のうちに寝山と見えたり中根の城山ならし

新撰六帖 そらやきりけはるゝ寝山の郭公名のりしほども忠ハさりける 知家朝臣

歌枕名寄 見しものは寝山にかゝる玉つらかゝるとみゆるも旅路なり 讀人不知

島田古縣 島田村むかしハ島田縣といひて島田臣といふ人の主維せし地なり其人の事ハ古事記に神八井耳命者尾張丹羽臣島田臣等之祖也とあるし新撰姓氏録の右京皇別に島田臣多朝臣同祖神八井耳命之後也五世孫武恵賀前命孫仲臣子上稚足天皇謚成務御代

尾張國嶋田上下二縣有悪神遣子上平服之復命之日賜号島田臣也と見えたり

そもそもみ無はいと成海作良の邊より引けりあが入江の海地乃水田船に乗りて作りけるなり島田と名づけ其地に住て漁りて上下乃二縣と分ちて也作馬ふに作良と其船留の島田と十町作まり見て飯りたんやもとより村梁塵愚案抄とそれの舟ゝるの也と註河海抄の薄雲の巻に曾乃不怪知知安假字をつけたれ知知安ゝ舟ゝるの也と註河海抄の薄雲の巻に曾乃不怪知良安と又八大蛇の類ひゝ今ゝ知りしゝ昔の下縣ゝ南の方ゝや有ゝんゝくゝうゝて今八其名ゝゝ成ゝ島田村上縣ゝ北東ゝ乃ゝに住に地名の遺り

大毛舊郷　和名類聚抄ゝ愛智郡大毛と云ふ八其地定り難ゝ事と云へゝども中尾義稲ゝ説にはけれはほ樽ゝやゝ今の大喜村なゝ

やいつゝ喜八めてゝ記文字なんハ例乃祝辞とゝりなき改め成ゝ

ゝ下總国の大瀧を今八大多喜と如けるゝと同例なり

田光池　田光庄大喜村にありて今八鯖ゝ池とも書ゝり此地八むゝ

田光乃庄司と以人乃居宅乃跡也と里老いひ傳へゝ君山の著書に土佐ゝり中むゝ乃庄司八往古の稲置と同一筋のゝなんむ

田子稲置と田光庄司と謬り傳ゝ

紀に景行天皇二十五年冬十月丁酉朔己酉遣日本武尊令擊熊襲時年十六於是日本武尊曰吾得善射者欲与行其何處有善射者鳥或者啓之曰美濃國有善射者曰弟彦公於是日本武尊遣葛城人宮戸彦弟彦公故弟彦公便卒石占横立及尾張田子之稲置乳迩之稲置而来と見えたり

年魚道水　山背村井戸田村の邊清泉涌出ル地ゝて今猶井戸田と云ふ地名も残り山背に清水ゝ井ゝ乃日本武尊乃火石水石ゝて二の石ゝとゝ打ひて駿河国の山徒ゝ難とのゝれ活ひ扱其奇石ゝを尾張へ投け活ひゝ水石の落ゝ所ゝて水の出き出たゝめ といふゝ此ゝゝ乃なゝ

宮酢媛御食なり

叙卷に尊ゝ乃すゝて活ひゝ岩戸姫日本書紀古事記ゝ

の事ゝ記ゝるゝ心にゝゝ乃ゝれゝを山復江復と以ゝ

志のゝゝと彼姫ゝ知らゝんゝゝて火石水石の二乃石ゝを駿河の富士乃

島田八古縣
桃の果
綿の女く
おりたつ
小田八
水
ひまを
たく
ふる
面
桃女

すそのより尾張の松子の島へしるそなへけられけるにこれ所乃紀大夫といふ者乃つくれる田の北の耳に火石ハおち南の耳に水石ハおつ二の石とも落る夜紀大夫のつくりける田一夜がうちに森となりて多くの木生出けりたり火石の落たる北の方にハいかなる洪水にも水出る事なく水石の落たる南の方にハ何なる旱魃にも水たゆる事なし是火石水石のしるし也と志るせり萬葉集の年魚道之水の長（當郡中根村にも愛智の水と称する名泉あり）歌と名所圖會初巻にのせ置きつ合せ見るべし

（しるしの碑もありて是又殊勝なる古跡なり）

配流人謫居乃地　井戸田村のあたりむかしハ海にさし出たる地にて其さま島乃如く流人を置てもたやすく他所へのがれ出がたき地なりし故世々の配流人ハこの村ならず此邊に差置かれしなるべし（諸国乃流人も同例にて摂津国へ左遷の人にハいつにても須磨の浦にうつされ伊豆国の流人といへハ誰にても伊東の蛭が小島に置れし如く當国への左遷人ハみな此井戸田に置かれし成べし）其人々ハ

坂合部連藥（日本書紀に齊明天皇四年十一月庚辰朔甲申有間皇子向赤兄家登樓而謀云云　戊子捉有間皇子與守君大石坂合部連藥　庚寅流坂合部連藥於尾張国と見えたり是有間皇子の謀反に與して當国へ流されしなり）

紀朝臣貞嗣（續日本後紀に承和九年秋七月癸巳朔己酉春宮坊帯刀伴健岑但馬権守従五位下橘朝臣逸勢等謀反事発覚　戊午詔曰坊司近仕者皆流罪尓當給不云云左京進正六位上紀朝臣貞嗣為上總権掾　庚申罪人橘逸勢除本姓賜非人姓流於伊豆国伴健岑流於隠岐国云云八月壬戌朔改上總権掾正六位上紀朝臣貞嗣為尾張権掾　同十二年秋七月丙午朔甲子有勅召配流人云云尾張権掾正六位上紀朝臣聴入京と見えたりはじめ上總に流され後尾張へ改め流されし也此人々謀反にくみしたりといへど私の逆意更になく春宮の御為にいさゝかかまへたる事の有りしやけん讒者の口より出たる無失なるべしさる故にやうやく御赦免帰京ありしなり逸勢朝臣が能書のほまれたぐひなく其娘の孝義の抜群なる凡人の及ぶ所にあらねば）

大枝朝臣音人（公卿補任の裏書に大枝朝臣音人承和五年任備中目　同九年配流尾張国　同十一年秋帰京と見え朝野羣載の大江匡衡が熱田宮祈請男挙周明春侍中所望状に匡衡始祖左衛門督音人卿在昔淪落當州云云とあれば淪落ハ配流の事なり何の罪なるありて配流ありしか今ハ志りかたし）

藤原朝臣良國（文明十三年乃古写本古今和歌集古註の世の中にいつらわがみのありてなしなしとやいはんありとやいはんといふ哥の註に是ハ文徳天皇の御時藤原良相と弟の良國と河内国あらそふと云所を諍て良相と失りんとする事顕はれ尾張の国へながされて良國がよめる哥也と志るせり古今集外との諸註にたえて見へぬ珍らしき説也）

藤原朝臣維弘（分脈系譜の左大臣武智麻呂の末葉に遠江権守藤原維頼子維弘保延之頃殺害遠江国司仍配尾張国と見えたり）

加賀守藤原師高

右衛門尉藤原師親　左兵衛尉藤原師平（兄弟三人井戸田に流されし事古書を引て既く名所圖會にいへり）

太政大臣藤原師長（井戸田に左遷の事名所圖會にいへり）

南禪寺長老玄瓚

入道師長公
歸洛御免許
家司等御迎
に參上

日吉神輿御入洛見聞雜記に應安元年戊申八月廿八日山門大衆頂戴神輿忽入洛云云
今度訴訟之篇目者近曾有南禪寺樓門結構之事而件樓門敷地高山門管領之内仍
樓門者可被撤却於長老可被遠流刑之由奏聞之云云公家緣驚思食之間二月二日南
禪寺長老玄瑞被下遠流之宣旨被移尾張国畢云云と見えたり是も井戸田に假居なり
なり其餘天正記にのせたる持萩大臣の尾張に配流なる事　如此の傳
説頗る多くれども未だ詳ならず

師長公出家の事　公卿補任に太政大臣從一位藤原師長治承三年
十一月十七日有事解官宣旨流浪即被進出宮城十二月十一日於尾
張国出家号妙音院と見え多脇系譜に師長公十二月十一日於配所尾
張国出家法名理覺也と云ふ　人物學覽に師長公薙髪改
名理覺とあるもあやまりなり又一代要記
にも十一月十七日太政大臣出花洛於尾張国出家とある如く京都と
出ぬひてのち廿日あまり過て剃髪なり　事明らかなる也我朝古記ど
もにもりて名所圖會にも繪に出家の形を画くなりといひ伝へも
坊主なりきとて琵琶ひき居たるは甚見苦しく此公のたしなみなる
なる故に且衣服の模様色合なども覚束なきなり人なりて有髪の

姿に繪かけるも也凡其頃長壽にして摂政関白太政大臣ホに昇位程
なる人の致仕の後入道せるまでなれば甚あれなり何ぞ此公ひとり出家
を恥とせんや又衣服品々事は法躰装束抄法中装束抄等に貴
人入道の着用の衣袴は墨色の繪布なりと云ふ　たとへばさる色合に
ても然るべし且亦兵範記に嘉應元年十月七日奈内晚頭太政入道
被奈内布衣白狩袴例袈裟別當宰相中將殿屋從云云とあるは入
道清盛公布衣の上なるに白なる袈裟をかけて奈内なりしなれば
彼是參考して法躰の姿に画りせるやと我は思ひし也百人一首一
夕話に大石真虎の業平朝臣をとりて人にきられ髪を延ばさんと
東国へ下行なり　姿を短髪に画りなれたるは其實なるべし初めて
たれ一見識なりと世に真虎を褒めけるまで業平朝臣を面伏なりと
面をそむけたとは更になるべしと

若宮八幡宮　井戸田村塚田天神社なり名所圖會に治承四年此

八幡大神を相模の鎌倉に勧請して今鶴岡下宮と祀りたるすいひ傳へれど定の給りすと志の置つるハいやまり也鎌倉の崔う田本社八幡宮ハ頼義朝臣の康平六年山城の石清水を勧請ゆゑ古社也今崔が岡ハ頼朝卿その祖宗を崇めんため井戸田の産土八幡宮を治暦四年に勧請せるゝ新社なれたりに此所よりの勧請なり鶴岡八幡宮寺社務職次第に本社者下若宮後冷泉院御宇伊豫守頼義朝臣奉勅定征伐安倍貞任之時康平六年癸卯八月潜奉勧請石清水建瑞籬於當国由井郷云云今治暦四年庚子十月十二日辛卯頼朝卿為崇祖宗點小林郷北麓構宮廟奉遷鶴岡下若宮致顔藝礼奠給故以此地号今鶴岡云云と志のせるハ此事也社僧の筆記なれ文義混解安うゝ其上井戸田より勧請のよハ見え林と宗祖を祭りゆゑんの礼を致すハ父母へ孝祀なれハ故郷をすゝの神を勝元へ移祭らゆに必せりされハ栩栩園隨筆にを

鎌倉八幡宮ハ尾州井戸田八幡宮を勧請せるり頼朝卿贄田乃幡屋にて誕生ゆり時井戸田八幡宮を産神と崇き後の鎌倉に勧請ゆりなるべしと見えり栩園恩田仲任ハ博学篤行の先生にてうきたゆ事を筆記する人にゆゝに

櫻田　名高き名所なれど古歌きハめてすくゆ名所圖會に万葉集の外の古詠二首をのせ其余ハ契冲法師以後の地下人の新詠四首を掲げ置きつ今又古人の哥一二首及び二百年ばり以前の俳諧の句を志ひてまに〳〵ゆす

家集早苗

ゆうさるゝ花の名なりとたい来てれ櫻田に面ゆ人　慶雲法印

光孝御記早苗

花ゆ人と志も志ゆり櫻田に又ゆ面とゝやめ志　光孝法印

以上夫春家集に木の句まき初きなゝりゆ中〔まま〕〔まま〕

内閣集

櫻田も志ゆ依保ゆ初めゆ知ゆう給　作者不知

遠山集

櫻田や依保堀こせゆけるゆ　作者不知

星降て石
化す

三十七

宣安　江戸藩士氏
尾州池田氏
ノ身

恵佐

吉久　丹波亀田氏

正直

昌意

吉行　伯耆藩士氏

入可　紀州藤井氏

政長

櫻田ハやんらあの〳〵やゝ百姓
王海集
櫻田にゐせとたてゝ〳〵ゐ並木う形
同
櫻田乃水橋なら〳〵ま姓の雨
玉海集　元亀
櫻田ふうけゐる水や花乃滝
毛吹草
櫻田れ極女ハ吉野糸ゝう形
同
櫻田の上田なれや菅野山
続古今集
櫻田に色ゝ形〳〵や花乃風
同
櫻田の傍ゐ乃城ま〳〵の月
尾張藩名所図会
櫻田乃傍ゐハ吉賢法師〳〵

薄雲乃巻に源氏の君西山の明石の上と詩ひ給へんとて立出給に紫の上にむゝひて申すゝりまんとの給へ〳〵ハ櫻の御なへ〳〵に御で引給き初て着給へり〳〵故催馬樂乃櫻人乃哥の言葉すて暇乞〳〵給ひ〳〵也契沖法師が源註拾遺に此櫻人の櫻ハ地乃名にて難波人と

〳〵が如〳〵和名抄に云尾張国愛智郡作良郷とれたりと志ゐ乃ゝり又源氏雲隠と〳〵巻ハ偽作ら〳〵ゐや〳〵き物なれど康平元年元應元年等の奥書ゐら古写本と寛文延宝に板刻〳〵なる本二通り流布ゐ其雲かゝれ六帖のうちに櫻人と〳〵巻ゐりて

ゐ〳〵世と思ひるすて櫻人花ゐちるとゝ〳〵ゐ〳〵

と詩ゐる紫のうへの昊魂乃夢のやうにて薫の君にいひけ詩ひ哥なり作良人ハ賤〳〵く田と造ゐが職業なれと如此風雅の限りにとてもやさゐしくめでた〳〵

頬脹観音　笠寺の事　笠寺の観音御頬少〳〵ゐくれて見え詩ハ俗人の頬の〳〵くれたゐハ福祐乃相也といハ定めて此御仏福貴長命と守り給へゐ成べし鳴海の長者が富饒なりしも此観音に縁ゐり〳〵故なり〳〵ゐ宗長手記に宮とたちて又摂津守　坂井村盛　各鳴海まで〳〵ゐ〳〵と打送られ名残多くして宮と鳴海の間乃笠寺と〳〵ゐり

長命井れ
古事

人おかく詣けると見て立れハ寺の本尊観音れかゝれて笠と
きせけゝる殊勝にてゆゝれにもさまく也此寺のむ〳〵も此本尊不ら
ちれて笠とき せ奉りけるさて彼ん笠寺といひ伝ふるハ と云伝
せり 東海道名所記にてんりん山まゝ嶋く寺ハ観音の灵場なり笠
とめ〳〵たる観音の木像たゝ〳〵すゑ此故に世に笠寺と名つく世三
年ぎゝに関帳ゆりといふ折ゆゝ夕立〳〵れハ観音堂へうけこみ雨
とゝ〳〵〳〵して

ゆゝたちにぬれ〳〵といきく雨やゝう笠さしてあううなり

吾妻鏡集 笠るろくるんなんこまりて

天井も法のちゝ〳〵にとゝぬまハゆ〳〵笠ちとさしていも彼ん 石田未得

明暦三年版の道中記 笠寺やゝ〳〵ゆ夕たちれ雨やゝ 一村

尾張名所記にむゝ〳〵此所〳〵宗長まゝてらゆゝ時寺にいゝき児わ
りと聞てたゝれに

古今著聞集に 眼光ハ隅にひつまづて立とゝり

児ゝんとさゝて来つゝハ笠寺のちゝ〳〵のすみゝるむけゝてれく

宗長の口すさひ覚東なゝ〳〵れ〳〵ゝも侍り其時薫のうちより
児の すあ

むけすゝて笠ハけゝも蒲洲のゝの面にもむく笠てゝ

宮本武蔵碑　笠寺の境内にあり本藩の世臣左右田武助藤原邦俊
大哉先生と号ゆ宮本武州の兵法正傳の達人なり武蔵没後此左右
田氏其碑ゝ営建ゆりゝ〳〵ゝ

宵月濱 并海士の焼ゝの名香　宵月ハ嗅継の異称ゝそう彩文字の
清濁のゝたゝ〳〵り同所二名なりゆゝまのゝ〳〵ゝ香ハたゝゝゆゝる
書籍に所見ゝ〳〵ゝ〳〵ゝも嫌るき傳説なれハ捨ゝく〳〵ゝ享保
十六辛亥年松井嘉久ゝ著述の東海道千里ゝ友ゝ〳〵道中記の鳴
海の条に左の方の濱邊に海士の塩屋有ゝ昔此所の塩屋すゝ海士の
焼ゝ〳〵ゝ〳〵名香出〳〵と也此所宵月の濱ゝ〳〵ゝと云ゝ〳〵 東行話
説に明ゝ八正月八日 宝暦十庚辰年 鳴海駅宿 ゝ立て聊此邊ゝ見廻りゝに大

明神の宮造り高くもひつきの濱星崎夜寒の里松風の里所ゐ者にたつゆれハ喚續の濱と宵月の濱とゝ昔蜑の焚きの名香出たる古跡ゐりと語るいろいろんやゝ〳〵幸に治部少輔の母尼公より旅行の友せよとて送られ松葉集とり出て見らに宵月の名ハなゝ喚続に千鳥の沙汰ハれども焚きの事なゝ

ゐハゆれに一賦の詠と狂ひ

鳴海海遥不成塩星崎寄蜑弗星崎松風頻送夜寒里宵月朝残喚續堰

今もゆゝハ松ゆゝもたきそれ蜑と拔ゝ中たゝ　土御門参議

と見えゝもその外水戸の長赤水が長寄行役日記をゝゐ近頃の紀行ゝ蜑のたゆきゝの名香の事と志ゐ出せり物甚多ゝ

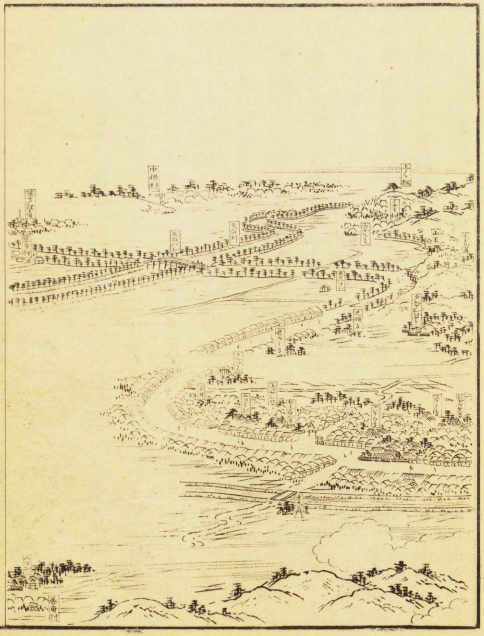
吾妻鏡　夢たゝ〳〵鳴海と出るゐ花御ゆゝくゝ記〳〵にもひつきの濱　石田本得

枕草子　吹風ゐ夢たゝ〳〵つゝゆゝ年とゐ来る花とひつきの濱　柏原安菊

星乃社　塩尻に星寄の浦星乃社ハむゝ此所へ星落て石と成りけ

ゐ故所乃名に得侍るゐや其石ハ今南野乃民の長の家に有りとい一ゐ今又契田の御神と此近きゐりに祭りゐゐに天の七星光りを放て附ゐゐ由をれゝり星寄の庄と云我国むゝ北辰の祭りをむゝけゐ事多ゝ道家にハ大乙と称ゝ釋氏にハ妙見と号い大内氏代ゝ此祭を尊む事をせゝまゝ末裔山口氏又此星寄に住まゝ事も侍まゝ北辰の祠なゝと立ちわゝにゐゝと志るせり名所圖會にゐゐ置つるとゝ甚たゝへり松平君山先生も塩尻乃説をゝりゝて著書に此趣きゝと漢文にとり扱ゝ志ゐせり扱又百八九十年以前にも此地に星れ降りゝ事ゐり編年大略に寛文十年庚戌五月廿七日愛智郡南野村庄屋平右衛門ゝ塩濱へ虚空より星落て石と成る御代官山本新助言上と志ゐせり塩尻も編年大略も物ゐき實録にてうきたる事と書ゐゐ物なゐゝす最ゝ信用すゝ

雅山文集の石動山記に能登国能登郡石動山青聞星墜為三石象天有三光也或曰此石自天漢流下故曰石動山云云とあるたゝしも諸国にも例ゐゝ云れゝも日本書紀に天智天皇三年三月高



鳴海邊ヶ崎圖

星隕於東飛と見る続日本紀に宝亀二年十一月辛丑有星隕西南其声如雷と志るし三代実録に元慶八年八月四日壬辰自戌至子小星四方流散行頻繁如雨とあるを如て天より星の隕ること甚多なれとも[illegible]地におちとどまりて石となりたるなどは未だ聞かず古書にもなき所見すくなし

称名山正行寺　鳳凰山善住寺　攝取山光照寺　これ星嵜本地村にあり

ひろみ能山田二郎重忠の建立にてもと高田宗なり　慶安四辛卯年浄土宗に改め府下建中寺の末刹となる　君山先生の著書に志るせり

上田主水正重康　同村の人也祖父小笠原弥右衛門重氏ハ新羅三郎源義光の餘裔也其子甚五衛門重光　信濃の小縣郡上田に住　上田氏と称ずのち此星嵜の郷に移住す　其子左太郎重康星嵜にて誕生す　丹羽長秀に仕へ　のち豊臣秀吉公に仕へ文禄三年七月従五位下に叙　主水正に住　豊臣の姓を給へ越前国を拝領　度々戦功あり　慶長五年の乱に故ありて食邑を没収せらるる剃髪して宗固と号す浅野家に客食す　大坂御退治の

時戦功を褒せられ子孫連綿として安芸侯の長臣たり　右上田家譜及び太閤記正和要簡等の諸書に参考して古れを畧記す

長命井の古跡　同本地村にあり　浄圓比丘尼といふ人此所に住みす　其宅地廣く薬師堂を営み彼仏を安置　ひろく崇敬　尼長壽をたもち百三十六歳にして卒ぜれば汲こと　井水ゆゑなく名つけ　土人いひ傳へ　浄圓尼又愛智尼といし　いと勝れたる人にて多脇系譜の源義朝の子の阿野全成のつぎ愛智四郎頼為の條に頼為配流奥州柴田而被召返之後以伯母尼浄圓跡尾張国愛智郡同則武名寺元暦二年八月三日被下安堵知行す　浄圓号愛智尼　と見えたり　此長命井の事ハ於平君山の著書にものせて其名を隨圓比丘尼と書けて浄圓隨圓まぎらひやすき名なれば土人が訛りて君山先生にこそ　と其まゝ書きたる物なれども多脇系譜に浄圓尼の

善之庵八幡祭
由緣名所見會に入り

長命の事ハ見えされハ隨國とハ全く別人の今ハもりかつ
村名に據まはなとて愛智の本地なそ近邊に愛智塚といふもあれ
ばもとより愛智氏の人の本居なるへしと思ひまもるかハ
土佐にある也則武名ハもとより一二里西の方なれハ尤懸持に領地
せし地と土佐へ

賢憬法師 并奉賀法師 牛毛荒井村の人なり七大寺年表の大須所藏の古写本に
律師賢憬宝亀五年二月廿四日任律師法相宗奥福寺剥皮燒指人
也尾張国人荒田井氏六十一有勅移住西大寺云云と土佐へ元亨釈書
に釈賢憬世姓荒田氏尾州人也少年出家受唯識于奥福寺宣教天
平勝宝七年東大寺戒檀成鑑真行竭磨法憬為受者是本朝登壇受
戒之始也性耐苦励勤修不倦剥皮然指典有才識延暦十二年朝廷議遷
都教憬見新都平安城地是歳十一月寂壽八十九もとより釈奉賀姓荒田
氏尾州人也天性疎通心地清朗紹隆像化闡揚玄風年及八十始学密宗

耽味而忘寝食根得之晩矣年八十四亡弘仁十一年也と又云へり
荒井ハ荒田井の略称也名所圖會の鳴海北条に乃せ寺成海郷戸主
荒田井直益麻呂か一族なり一其人の戸口荒田井直牛養能書うそ
東大寺の藏経を写しを賢憬のゆりにられて村名の牛毛ハ則牛
養ゆへなり

鳴尾松 牛毛荒井村にあり君山先生の著書に鳴尾松在鳴海村有川傍
土人附會名之而已とあり古松なり今ハ片枝枯まそなりたるさを見
所すく時一此星寄海邊と往古ハなるへの濱ともいひしなる増基法
師の遠江の日記に帰路の条にあるもしたり山本の歌に次にい
もしの心を

君か代ハなるへのしに波たちて松の木ことに松にあらの心
こうまに人になるへの濱と云所の名也扨其松ハ又く絶しなり
云云と又云へり此紀行のさを攝津の國のなるへ尾のうしとあるに

ほゝ[illegible]しく此地とその歌なり〔一〕

鳴海庄　其地甚廣く凡南の方善慶村乃邊より北の方米之木村の辺り迄てもうそ三里ばかり東の方沓掛村の邊より西の方古井村の辺り迄三里許り一圓二十餘村皆鳴海庄と呼なり其中央なる山に御林寺をれしくの小名ハ辺れども惣名ハ成海山なり古哥にもよみ成海の里ハ古鳴海村相原村等なり〔一〕鳴海潟鳴海の浦ハ星崎の庄の境なる濱手ハ地なり〔一〕其哥も多く名所圖會に出なり今又其残りを拾ひて少しくこゝに加ふ

後拾遺集　後鳥羽院

いきの松原ハなるみの浦に近なるゆえに遠なる海ハ内海なり

赤染衛門集

同

道貞朝臣

同

なるみの浦ハ海の名なり

経年集

赤染衛門

散木集

後頼朝臣

千載集　藤原顕綱朝臣

みちのくにまかりくだりしとき

なるみの浦の沖ハ海なり

後鳥羽院

内裏名所百首

なるみの浦の沖ハ海なり

定家朝臣

明月記

なるみの浦の沖ハ海なり

家隆朝臣

寛喜四年三月後堀河天皇和哥

なるみの浦の沖ハ海なり

同

人麿集

なるみの浦の沖ハ海なり

同

家隆朝臣

同

なるみの浦の沖ハ海なり

御製

同

なるみの浦の沖ハ海なり

具親朝臣

拾遺集

なるみの浦の沖ハ海なり

後鳥羽御女

同

なるみの浦の沖ハ海なり

慈鎮和尚

続古今集

なるみの浦の沖ハ海なり

同

なるみの浦の沖ハ海なり

為家朝臣

地獄沢の古事

家集
なるみかた夜の日たちに松かけにしほのひかたや立ちて涼まん　為家朝臣

詠千首和歌　恋
志らせてもいふかひなるみの濱楸志ほるゝ波に袖をまかせつゝ　同

新千載集　羇中潟といふ事を
旅人のいきそいそくらんなるみかた志ほひのうちに道をまかせて　前大納言為氏

新續古今集
人ことにわたりならへるなるみかたあまなれはいけれとよるとは　法橋顕昭

為忠家百首　海舩
松かせの吹鳴海の沖に釣舟乃波にたゆたふ春乃ゆふくれ　藤原為業

久安百首　春二十首の中に
いまはとて鳴海の浦にうつるかけのゆくゑもしらぬやまかせの人　尾張守親隆

宝治百首　浦舩
こゝろさしいたに鳴海の浦風にたゆたふ舩のゆくゑしらせよ　藤原忠定朝臣

十六夜日記　熱田宮へ参りて硯より出てうたよみけてかへりぬ
なるみ潟まつ乃浦風たえまなくてこゝはわかれなし心にやあらん　阿佛

夫木抄　洞院摂政家百首　旅
なるみ潟汐満くれにひとふなしきの沖を遠ふうち人　従三位行能卿

同　寛喜元年女御入内屏風歌合　旅泊千鳥
鳴海かたしほひの磯乃床は風さえてなけきにも千鳥なくなり　平維正朝臣

同　六帖題
海士人や網ほすらしも鳴海かた沖津波また袖ひちぬ　為兼卿

詠千首和哥　旅恋
なみたれ又旅になるみとこちてと袖にもしまかる世なりせは　権大納言師兼

千首和哥　潟月
なるみ潟志ほのみちひもしらぬ夜之月とため海士の釣舟　為尹卿

新和哥集　海辺雪
鳴海かたかたの道を雪ふれは浪まや人のゆきてなるらん　生願法師

草菴集　浦千鳥
浦遠くふかくも志ほやたゝぬらん鳴海潟波にまかせて立千鳥かな　頓阿法師

藤葉集　恋哥の中に
今はまたなにをたのまんうらみてもかひなき恋に鳴海の浦風をふく　寛尊法親王

草根集　羇旅
なるみ潟あめ雲はれなかちなく吹こしかりさわらひを立ぬけさりし汐風　正徹法師

同　旅泊
志ほみちてはなるみの浦の辺に行舟をたつこる波は忠七あらは　同

同　旅恋
うたて我人のうらむ世を鳴海のあたりに道をたつらむ　同

同　人傳旅恋
あはれにもなるみれはまたさしかきに我浦風の吹と知らせよ　同

富士紀行　名所浦月
過来ける跡になるみの汐干潟心はのこる秋の月かけ　権大納言雅世

家集　旅行雪
過行し友をも方に浦なれは雪やなるみの上野なるらん　堯孝法印

内裡御哥合　海辺夏
なるみ潟浦風寒く吹志をに志ほひに待る雲のかけはし　沙弥宗雅

春夢草　海路
夜を寒み鳴く千鳥のなるみのうらの胡の船出を音にのみきくらん　肖柏法師

牡丹花千首　羇中潟
夜の秋のさよもなからふ鳴海の友なしにとりはされやなく　同

亜槐集　文安六年十月十八日内裏月次百首浜宿海路の中に
汐風に波よりなまく鳴海かた都のそらのやまのとりかな　前権大納言雅親

百番哥合 暮秋鹿

かり枕てふも別まゆなるみ潟になれしやハとめぬ鹿の声

沙弥浄空

栢玉集 水香

浦風のさそひやいはうしくもり空になるみの跡遠れはけれ乃

後栢原院御製

雪玉集 若木百首和哥慈二十首のうち

いつれとも思ひわけまし沖津波よるに鳴海のうらみなくハ

實隆公

家集 寄神恋

うきこともまてぬ我恋ハ何となるみの浦ハたてそ

大内より…

櫻井基佐

家集

わすれしな小かれまたなるみ潟さひしき波に立ちかへりなん

なるみの里を…

權大納言言繼

東の道の記

涼しさハ送り来にけり浜波もよるになるみの月のならに

光廣卿

尾陽雜記 寛永十年二月十七日…

なれまつ浦風寒く鳴海潟霞に志ほむ春もおかしく

飛鳥井雅胤

同

なるみ潟潮風いたく夕波にたちし峰三小夜ちとりかね

栄室頼業

同 尾張なる人より枕と贈りけれは

打ちかさね枕ハなるみの夜は林志ほれそまた袖乃浦波

沢庵和尚

新続題林 寄潟恋

あはれ乃たてたふ雲て鳴海潟恋まされ更ハなそしらるも

實隆公

同 霧中潟

たち出し月さへ遠くなるみ潟そこともしら波のかゝりにたちて

兼亂朝臣

尾張八景 鳴海帰帆

夕まくれ雨しくなるみ潟あまのをふねそそ鳴門友よふ

佐野紹益

藻のちり 鳴海にまかり侍りしに

鳴海かた波の枕乃夢さめて志ほ心なく袖そひちぬる

谷口重以

佐由利葉 尾張の国に下りし頃…京に別れし人を

沖津なるみちかき人よいふことは志のなるみのうらみをとれ

百合女

家集 鳴海なる浦玉藤兵衛…

玉藻の鳴海の浦にあひき見しさハうきたつふねひきさ

綾足

同

清き浪たつる中にもいつくちの鳴海の浦のいさりしれとも

同

春のなかめ 千鳥

なるみ潟月ハおちかた波の上に影を友とや千鳥なくらん

源秀雲

蘿窓集 海天新月

秋もなや深くなるみの浦波に影うつそふ初こよひの影

也有翁

那濃曽和哥集

月ハひとつみハ行まうた鳴海さく千鳥鳴乃ところくに

讀人不知

元文日本紀本 男女国の傳

鳴るなるみの海干潟はいはく沖津志ら波

明恵上人

安永九年 狂哥五十三驛 鳴海初春

春霞たちいそくなれハおなし路くなるみの宿は元日のそら

西原有隣

旅邸

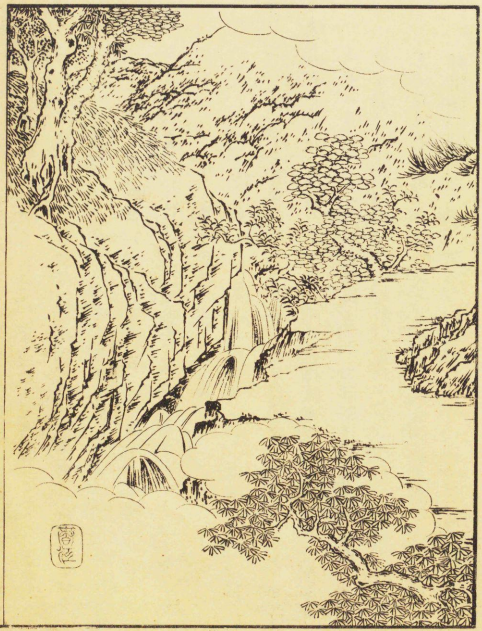
孤節寄宿釣漁亭一夜回簷風雨声側枕長愁前路滑天明依舊海潮鳴

虎關禪師

明暦四年二月晦日宿鳴海

海水晝無声夜風怒浪生信哉韓文語物不得平鳴

山崎闇齋



融傳和尚
狼の故事

鳴海潟月夜かけて波にうつ浮ふけしきえならん　天野信景

東行日記袖の雪

鳴海潮光入暁昇雪風送去一帆舟客衣襲涙雲千里月落瞑烟不勝憂

狗猫集の連句

しらしらと秋に鳴海の聲せさし来て

池鯉鮒の里九月を詠むは　重頼

慶安三 熱田法楽万句

夜さむさにきはや逢の宿はむき

月に小舟宿我この鳴海かな　津島 友阿

続連珠

すゝ鴨のちしらぬ波やなるこ潟　丹波笹原 すて女

枇杷園句集

鳴海まて志られとめけり菜雑の琉　士朗

鳴海余一清時　鳴海の庄に居住の人也信濃源氏小笠原左京大夫長清の十一男にて与一清時と名乗ける分脈系譜に清時鳴海金とあるは傳字の誤字にて余一の二文字を金の一字にあやまりたるなり此分脈系譜の板本の誤りを傳へて大系圖及び武家評林系圖等に鳴海金十郎清時と志るせり皆へなきの至りなりすべて十一男十二男以下は十に余る意にて余一余二なとゝ名乗が古例也真田与一那須与一等は余文字を与に書替たり扨長清男子拾余人惣領小笠原太郎長経より次第して藤寄十郎行長までは皆四郎五郎なんど郎文字を添へて称し鳴海余一大蔵与二に至りて郎文字を省き名のりくはしくは分脈系譜を見て知べし又天野信景の人物誌に鳴海助右衛門鳴海村の人織田信長公に仕へしよしいへるも此清時の裔孫か今は知がたし其外當所に住たりし高名の武士多かれど當御代に功なきは煩らはしければこれをもらせり

地獄沢　鳴海山のうちにあるぐされど其所今定かならず尾張守元命朝臣が女のもとに通ひける時地蔵を彫りたる高卒都婆を小川の仮橋として蹈渡りし罪により地獄におちたりしを彼地蔵たすけ給ひ只一夜に活還りしよし地蔵菩薩霊験記に見えたるを名所圖會の如意寺の条にあげ置ける古跡なり俗談なるべければとるべき傳へにもあらずして

章魚畠
乃古覽
古今奇談集
海にすむ
たこ
八たりとうと
いうん
ぬしにして、
ものいさ
ゆえ
時々信仏礼愛

もとは八尋八島元廣
卿の集書にしるく
地藏頭に夢すり記
面の像一寸来の制也
ノ也ロ十手観
音ったこ入道と称ど
乃ちりこ入道と称余ハ
すべて知ぬべし

犬筑波集の雜の部の連歌にを

かくしけ弦幽んてたすりぬする

たふ沿にまこ沿ぬさなにそとハも

しろそうり

狼の奇事　狼の咽のうちに數骨のたちすくと愁（悩の融傳和尚が道徳を見込み鳴海山に出むひ蹲居して告て其骨を除きもひ事名所圖會の狭田の正覚寺の条に志ゆ）置つ今其様をも

に圖して童覧に備へ

章魚圖　鳴海宿の東北にゆり往古ハ此邊まて海濱にてたこを釣り蛤

見の類をもとりたりしが天白川相原川等の砂土流き出洲と成り

新田と築て今ハまつ海てきまそ三十町許り隔ち其ねもけ

と見えて只たこをとゝ名のみ残り或ハ田と犂て地中より見

殼の多く出ゆ事ゆりてむしのさゆを知るよし里老いひ伝（君山

先生も其趣にを筆記せしも也凡たこの陸地にのがら事ハ本朝食

鑑の鮹魚の条に大章擧夜出水上岸捧腹昂頭怒目蹈其八足捷走如

飛入田圃掘芋而食田夫夜見之而驚呼為竪日中亦無人則出矣或田

夫竊覘之用長竿而打撥則獲之亦有焉と志ゆ）其外物産の書にも

に多く見えすり俗にたこの入道といゆも志の類ひなり）

諏訪大明神社　皆掛村にゆり應永三十二乙巳年藤原義行創建

と社傳及ひ君山著書にいつり義行ハいふゆる人ゆ今ハ知りて

例祭八月廿日神主磯部氏ゆさゆ

出生寺舊跡　同村のうちにあり（くして今其所定ゆなりず下高根

ゆ子安の清水といふ古跡ハ出生に縁ゆる名なれバ其ゆりに在り

しゆ寺ゆ或説に出生寺ハ三河ゆ二村山法藏寺の旧名なりもいつり

されしも鳴海にちう記す古書にゆれハ志りく皆掛村のうちに

しゆす梅華無尽藏に

二村山生寺

一寺則行基菩薩之旧居　二王則雲濤所刻也

万里和尚

二村山有古招提鳴海雲埋飛鳥西誓首行基老菩薩猶令護法假王洒鳴海在二村数里西と志ほせり此詩と見て考あて飛鳥西と所ろ飛鳥ハとゝまとゝむ〳〵三河乃鳥捕の駅ろう〳〵其古駅の跡・法蔵寺ゝゝ古跡さゝ〳〵なれハ最鳴海にちうき證なる

二村山　古来、すり尾張の山ゝも三河乃山ゝもいひて一定ゝゝてゝといゝ〳〵も袖中抄に めさむ〳〵山ハ尾張国にありとええ八雲御抄よ を めさむ〳〵参河遠尾張山也云云と志ほせ侍りて三河とハゝゝむ〳〵に尾張の山なりとかきかゝ〳〵れたりせ後つり片山本の続日本王代一覧に明和四年七月二日尾州二村山印刻本に二村山と二門津清出て洪水民家と漂流〳〵人馬多く溺死す東海道宮駅鳴海宿多破損すゆゑ志ほせるも此地の事にて他国人も二村と尾張乃山とすほ事と知ゝ〳〵名所圖會に〳〵せほ二村山乃哥ゝゝに追加に

大和物語集
なりくるきゝ二村山とゝ侍ゝ侍ゝ人ゝ
後撰和歌集
いとゝ〳〵ものをこそ思へ
明月記和歌集
なやハ二村山とこえ本てゝ君と逢まくをゝもこゝ
同
名〳〵に張りくゝ侍ゝ
木木抄
慶長元年二村山の居ぢ〳〵たゝりとゝ
同
東海乃山ゝゝ春の張ゝ侍ゝ二村山ゝ
同
ゝゝ代ゝゝ名ゝて氏ゝ
隠岐の国中に
名ゝ二村山ゝ
雪玉集
張ゝ
新勅撰集
ゝゝ私たちゝ
新続題林
張ゝ
源氏物語
ゝ二村山
源俊頼朝臣
参議雅経卿
橘敦元
同
植甲納言俊忠
後九条内大臣
冷泉太政大臣
前参議為賢
資隆公
准大臣資隆公
為久卿
岡田豊前守
源喜政

野並び梅
紅顔林
色ふかせたる
ものに
さそはれて
ひまぬる日
梅の下陰
陸里

知歌うたれる　玉くしげ　ふたもゝ山やまを　ふたもゝ山　ゆゑ　初雪と　ぬく　何ぞ

井上五郎
安信辰隆

富士浅間社　祐福寺村にあり今ハ玉松山祐福寺の奥の院と称す延喜式内の愛智郡伊副神社本國神名帳に從三位伊副天神と称る古社なるべし伊福ハ舊郷名にて其地に鎮座ます神を伊副神社と称し又其所に創建の寺を伊福寺と名づけしが祐福寺とめでたき文字にうきかへし也山城国乙訓郡に乙訓神社又乙訓寺ある同例なり諸国にとなへたぐひ甚多し當社山にて祈ふれ　りまた故浅間の社ゆゑ称しなるべし　摂社神明祠をもつぬ熊野伊豆白山日吉鹿島三島箱根等の數祠及び山の麓に大日不動某師文殊等の堂数宇ありていうめり古社なり例祭五月廿八日祐福寺の僧衆大般若経を讀誦せり

三／五十七／2

302894
A294
281
オ
1A-3-3

昭和五年九月十五日印刷
昭和五年九月二十日發行

編輯兼發行者　岩山善三郎　名古屋市中區錦町二丁目十二番地
印刷者　野榮一　名古屋市中區錦町二丁目十二番地
印刷所　浪速寫眞工藝社　名古屋市西區南堀江通五丁目十二番地
發行所　古文書研究會　名古屋市東區白壁一丁目四番地

愛知県
1103263681
294
オ
1A-3-9